

◆ 展示品から 鶴峰と機外

鶴峰平沼淑郎氏（鶴峰は号）と機外平沼騏一郎（機外は号）氏は、三歳違いの兄弟である。

兄の鶴峰は慶應元年（1864）、弟の機外は慶應三年（1867）、共に江戸時代最末期の生まれである。

鶴峰は、東京帝大文学部を卒業後、法学博士となり経済・法律の研究者として学究の道に進み、岡山師範学校教頭や早稲田大学教授等を経た後、第三代早稲田大学学長を務めている。

一方機外は、東京帝大法学部を卒業後やはり法学博士となるが、司法省に入省して検事総長や大審院長等を経た後、政治の世界に轉身して第二代日本大学総長を務めた後、第三十五代内閣総理大臣となっている。

この二人は、大学卒業後の道を各々異にしてはいるが、共に本学の前進大東文化学院に深く関係した因縁残からぬ兄弟であり、共に多くの揮毫や書幅を残している。

まず、本学との関係であるが、機外は言うまでも無く大東文化協会第三代会頭にして大東文化学院初代総長である。

一方兄の鶴峰は、大東文化学院創立期に経済学や経済学概論を講じられた学院の教授である。

さて、問題はこの二人の書であるが、「兄弟孰の書が優れているか」などと言う野暮な事は言うまい。この兄弟は、幼少時に共に漢学を教わっており、その見識や教養には、共に深廣なるものが有ると言えよう。

鶴峰は、初め津山の儒者齋藤淡堂に『四書』や『詩経』を学び、上京後更に小石川の廣瀬惟熙に漢学を學んでいる。

一方機外は、五歳で上京後、初め津山藩出身の博物学者にして儒医でもあった宇田川興齋に漢学を学び、次いで備中の儒者菊池文理の次男で津山藩の蘭学者箕作阮甫の婿養子となった箕作秋坪の三叉學舎で、漢学や英語を學んでいる。

鶴峰は、伸びやかな行書で「志高意遠」と有る。この言葉は特に古典と言う譯では無く、物事を譽める時に良く使われる言葉であるが、或いは『三國志』の『魏志』武帝紀に有る「志大而智小」を洒落て振ったものであろうか。

一方機外は、堂々たる楷書で「敬立而内直」の五字を記している。これは言うまでも無く、『易經』文言傳の「敬以直内」から取った言葉である。

学究者の大らかな行書であれ、政治家の厳格な楷書であれ、この兄弟の書は共に筆勢が有り、単に言葉を寫すのではなく、己が心に感知して咀嚼したものを己が言葉として筆に載せており、何處と無く幼時に漢学に接した明治人の、意氣志概を感じさせる筆遣いである様に思えてならない。

（大東文化文学部中国学科教授 中林史朗）

平沼淑郎書幅（中林史朗氏蔵）



平沼騏一郎書幅（中林史朗氏蔵）



学園関係者インタビュー・・・

細川雨村氏と恩師・笠井南村先生の思い出の地を訪ねて

まだ肌寒い3月下旬、長野県上田市に細川雨村（武敏）氏を訪ねた。信州上田ご出身の細川氏は大東文化学院本科（第3部）の第20期生である。

細川氏からは戦時体制下から敗戦直後までの学院における貴重な体験談を長時間にわたりお話をいただいた。旧制上田中学での笠井南村先生との出会いから、その後大東文化学院時代を通して生涯続く、厳しくも心温まる師弟関係の様子を伺うことができた。細川氏の「雨村」の名は、将来を嘱望された氏が、土屋竹雨先生（初代大学長）の「雨」と笠井南村先生の「村」とを両先生から直接いただいたものだと言う。戦後の大東文化学院生の生活の基盤となった南村寮を創られた笠井南村先生の、学問に対する厳しい様と実生活における人間味溢れる様とを昨日のここのように生き生きと語られる細川氏が印象的であった。



自宅書斎での細川氏（2009年3月22日）

（大東文化歴史資料館 浅沼薫奈）

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園関係者インタビューや資料寄贈を随時お願いしています。情報等がございましたらお気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。